岡山県立短期大学紀要　43巻　12～18頁（1991）

漱石作品における女性像（二）

柴田奈美

はじめに

前稿において、「陽の女」と「陰の女」のタイプ分けは、一つの作品ごとに可能であることを明らかにした。この「陽の女」の中で、藤尾・美禰子系列の者は、藤尾・豊子・那美・美禰子・千代子・お直・お住・お延である。

漱石は、右の女性たちを「我」をもった新しい女性として描いている。ここでは、この女性たちがどのような点で新しいのかを考察し、当時の社会に生まれた新しい女性と比較し、漱石の女性を新しいと意識する点がどこにあったのかを明らかにしたい。（但し、豊子は諧詭味が強いので、省略する。）

(1)『虞美人草』の藤尾

資産家の娘。父は亡くなり、実母と腹違いの兄と暮らしている。

「英語丈は御蔭さまで大変好きな模様で」（第二章）「女詩人」（第六章）「詩を解する女」（第八章）とあり、教養のあることがわかる。

また、「宅に許り居て、よく斯う満足して居られると藤尾が思ふ」（第六章）「内心にふんと思つた。此眼は、此袖は、此詩と此歌は、鍋、炭取の類ではない」「実用の二字を冠られた時、女は――美くしい女は――本来の面目を失つて、無上の侮辱を受ける」（第六章）とあり、家庭の中に引き籠り、家事に専念する昔ながらの女性の生き方を否定している。

恋愛についての描写は、「（男が心を迷わすのを）女は只心地よげに見遣る」「此女は迷へとのみ黒い眸を動かす。迷はぬものは凡て此女の敵である。迷ふて、苦しんで、狂ふて、躍る時、始めて女の御意は目出度い」（第十二章）「己れの為にする愛を解する。人の為にする愛の存在し得るやと考へた事もない」（同前）「文明の淑女は人を馬鹿にするを第一義とする。人に馬鹿にされるのを死に優る不面目と思ふ」（同前）とあり、気位の高い女性として描かれている。また、兄の「どうも淡粧して、活動する奴が一番人間の分子が多くつて危険だ」（第五章）という評や、「女の二十四は男の三十にあたる。理も知らぬ、非も知らぬ」（第二章）「詩趣はある、道義はない」（第十二章）とあるように、誠の愛情を男性に注げない女性でもある。

その他に、次のような描写があり、激しい気性が窺われる。

「『兄の本を庭へ抛げたんですよ』と藤尾は母を差し置いて、鋭い返事を小野さんの眉間へ向けて抛げつけた」（第二章）「浅墓な跳ね返りものだ」（第十七条）「稲妻ははたくとクレオパトラの眸から飛ぶ。何を猪子才なと小野さんの額を射た」（第十八章）「我の女は虚栄の毒を仰いで斃れた」（第十九章）

以上のことから、藤尾の性質をまとめると、次の三点にまとめられよう。

一、教養（詩趣）のあること。

二、恋愛において、男を弄び道義がないこと。

三、激しい気性と高い気位

(2)『草枕』の那美

志保田という村のものもちの娘。離婚して実家に戻っている。

那美の部屋に、「白隠和尚の遠良天釜と、伊勢物語の一巻が並んでゐる」（第四章）という描写や、「余」の創った俳句を添削したということから、教養のあることがわかる。また、「余」と互角に議論できる機知がある。

恋愛観は、「（長良の乙女の歌が）憐れでせうか。私ならあんな歌は咏みませんね。第一、淵川へ身を投げるなんて、つまらないぢやありませんか」「どうするつて、訳ないぢやありませんか。さゝだ男もさゝべ男も、男妾にする許りですわ」（第四章）と、男性よりも優位に立とうとするものである。

さらに、「余」の那美についての評としては次のようなものがあり、男性の心を弄ぶ女性として描かれている。

「あの女を役者にしたら、立派な女形が出来る」「あの女は家のなかで、常住芝居をして居る。しかも芝居をして居るとは気づかん。自然天然に芝居をして居る」「あの女の所作を芝居と見なければ、薄気味がわるくて一日も居たゝまれん」「（画として見ると）今迄見た女のうちで尤もうつくしい所作をする」（第十二章）「こちらに窺ふ人があつて、其人が自分の為にどれ程やきもき思ふて居るか、微塵も気に掛からぬ有様で通る」（第六章）「あの女の顔に普段充満して居るものは、人を馬鹿にする微笑（うすわらひ）と、勝たう、勝たうと焦る八の字のみ」（第十章）

読者に強烈な印象を与えるのは、風呂場の出来事であると思うが、他にも次のような描写があり、激しい気性であることがわかる。

「（文をつけた坊主が）御経を上げてると、突然あの女が飛び込んで来て」「そんなに可愛いなら、仏様の前で、一所に寝ようつて、出し抜けに、泰安さんの頸つ玉へかぢりついたんでさあ」（第五章）「わたしが軍人になれりやとうになつてゐます。今頃は死んでゐます。久一さん。お前も死ぬがいゝ。生きて帰つちや外聞がわるい」（第十三章）

他に性質を表わしている部分として、「軽侮の裏に、何となく人に縋りたい景色が見える。人を馬鹿にした様子の底に慎み深い分別がほのめいてゐる。才に任せ、気を負へば百人の男子を物の数とも思はぬ勢の下から温和しい情けが吾知らず湧いて出る」「悟りと迷ひが一軒の家に喧嘩をしながらも同居して居る體」（第三章）「（余が女のことを俳句に創ると）女は笑ひながら、『こんな一筆がきでは、いけません。もっと私の気象の出る様に、丁寧にかいて下さい』」（第十三章）等がある。

悟ろうとするが悟りきれぬ、生な人間の分子の多い女性として描かれている。

以上をまとめると、次の三点にまとめられよう。

一、教養と機智のあること。

二、恋愛において、男より優位に立とうとし、悟りと迷いが同居していること。

三、激しい気性と高い気位。

(3) 『三四郎』の美禰子

学士、里見恭助の妹。

「『Pity's akin to love』と美禰子が繰り返した。美しい奇麗な発音であつた。」（第四章）「迷へる子（ストレイ・シープ）――解つて？」（第五章）「（美禰子の描いた絵葉書は）手際から云つても敬服の至りである。諸事明瞭に出来上つてゐる」（第六章）等の描写から、教養や機智のあることがわかる。

美禰子にあこがれる三四郎の目には、美禰子は次のように映つて見える。

「オラプチュアス！池の女のこの時の眼付を形容するには是より外に言葉がない。何か訴へてゐる。艶なるあるものを訴へてゐる。さうして正しく官能に訴へてゐる。けれども官能の骨を透して髄に徹する訴へ方である。甘いものに堪え得る程度を越えて、烈しい刺激と変ずる訴へ方である。甘いと云はんよりは苦痛である。卑しく媚びるのとは無論違ふ。見られるものゝ方が是非媚びたくなるほどに残酷な眼付である」（第四章）「三四郎はこの女にはとても叶はないやうな気がどこかでした。同時に自分の腹を見抜かれたといふ自覚に伴ふ一種の屈辱をかすかに感じた」（第五章）「惚れられてゐるんだか、馬鹿にされてゐるんだか、怖がつて可いんだか、蔑んで可いんだか、廃すべきだか、続けべきだか訳の分らない囚はれ方である。三四郎は忌々敷なつた」（第七章）「生きてゐる美禰子に対しては、美しい享楽の底に、一種の苦悶がある」（第十章）

このように、恋しい反面。一種の不快感を男性に与える女性として描かれている。

しかし、次のような描写があるために、藤尾のようなアクの強さは失われている。

「女は縋る様に付いて来た。『あなたを愚弄したんぢや無いのよ』」『悪くつて？先刻のこと』」「『だつて』と云ひながら、寄つて来た。『私、何故だが、あゝ為たかつたんですもの。野々宮さんに失礼する積ぢやないんですけれども』女は瞳を定めて、三四郎を見た」（第八章）

この他に、美禰子の性質を表す描写に、次のようなものがある。

「あの女は落ち付いて居て、乱暴だ」「あの女は心が乱暴だ。尤も乱暴と云つても、普通の乱暴とは意味が違ふ」「イブセンの女のやうな所がある」（第六章）「あの君の知つてる里見といふ女があるでせう。あれも一種の露悪家で」（第七章）「あの女は自分の行きたい所でなくつちや行きつこない。勧めたつて駄目だ。好きな人がある迄独身で置くがいゝ」「全く西洋流だね」（第七章）「此女は我儘に育つたに違いない。それから家庭にゐて、普通の女性以上の自由を有して、万事意の如く振舞ふに違ない」（第八章）「夫として尊敬の出来ない人の所へは始から行く気はないんだから」（第十二章）

これらには、自我を持ち、自由に生きようとする美禰子が描かれている。

また、「女には詩人が多い」（第五章）には、論理ではなく、感情によって動く女性の激しさが表われている。[注]

以上をまとめると、次の三点にまとめられよう。

一、教養・機智があること。

二、無意識ではあるが、男性に屈辱感を味わわせ、不快を感じさせること。

三、強い自我と感情によって動く激しさ。

(4)『彼岸過迄』の千代子

実業家、田口の長女。

「何んな人の前へ出ても貴女として振舞つて通るべき気位を具へ」（「須永の話」第三十章）「ハイカラ」（同前）であるが、「学問の乏しい、見識の狭い」（「同前」第十二章）女性である。

藤尾などと共通して、哲学的な思考をしない、感情的な女性として描かれた表現としては、次のようなものがある。

「彼女の有つてゐる善悪是非の分別は殆んど学問や経験を独立してゐる。たゞ直覚的に相手を目当に燃え出す丈である」（「同前」第十一章）「風の如く自由に振舞ふのは、先の見えない程強い感情が一度に胸に湧き出るからである。彼女は僕の知つてゐる人間のうちで、最も恐れない一人である。だから恐れる僕を軽蔑するのである。僕は又感情といふ自分の重みで蹴爪付さうな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐れむのである。否時によると彼女の為に戦慄するのである」（「同前」第十二章）

千代子に愛情を抱く須永の目には、彼女の言動が次のように映つている。

「若し親切を冠らない技巧が彼女の本義なら」「高木を媒鳥に僕を釣る積か。釣るのは、最後の目的もない癖に、唯僕の彼女に対する愛情を一時的に刺激して楽しむ積か」（「同前」第三十一章）「非常な不愉快を感じた」（「同前」第二十九章）「ハイカラな有毒の材料」（「同前」第三十章）「千代子の何の部分が僕の人格を墮落させるのだらうか」（同前）「僕は斯う盆槍屈托してゐる所を千代子に見られるのを屈辱の様に感じた」（「同前」第三十三章）「今僕の前に現われた彼女は、唯勝気に充ちた丈の、世間に有りふれた、俗ぽい婦人としか見えなかつた」（「同前」第三十五章）

以上の描写は、男性よりも優位に立とうとし、技巧的な点で藤尾的であるが、次のような描写があるために、「悪」のイメージは大分薄らいでいる。

「純粋な気象を受けて生まれた彼女の感情」（「同前」第六章）「病気の所為か何時もよりしんみり落付いてゐた」「一人ぼつちで妙に沈んでゐる姿を見た時、僕は不関可憐な心を起した」（「同前」第九章）

この他に、次の描写には激情的な性質があらわれている。

「彼女の様に万事明けつ放しに腹を見せなければ気の済まない者」（「同前」第三十四章）「露骨のがら〳〵した者」（「同前」第七章）「大蟇（千代子）は少し猛烈すぎる」（「同前」第十一章）

以上をまとめると、次の三点にまとめられよう。

一、学問、見識がほとんどなく、感情のままに動くこと。

二、恋愛に関しては技巧的で、男性に不快を感じさせること。

三、気位が高く、気性の激しいこと

(5)『行人』のお直

大学教授、一郎の妻。

「夫は母にも嫂（お直）にも通じない、たゞ父と自分（二郎）に解る趣であつた」（「兄」第三章）「嫂の鼓膜には肝腎の『松門』さへ人間としてよりも寧ろ獣類の吠として不快に響いたらしい」（「兄」第十二章）「詩や小説にそれ程親しみのない」（「兄」第三十八章）とあるように、学問、教養がない。

愛情の面では、夫一郎に「おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女」（「兄」第二十章）と思わせるような、「冷淡」な妻である。

一方、一郎の弟の二郎は、次のように感じている。

「彼女の前へ出た今の自分が何だか彼女から一段低く見縊られてゐる様な気がしてならなかつた。それだのに其処に一種の親しみを感じずには又居られなかつた」（「兄」第三十章）「自分は彼女と話してゐる間始終彼女から翻弄されつゝある様な心持がした」（「兄」第三十八章）「彼女の事を考へると愉快であつた。同時に不愉快であつた。何だか柔かい青大将に身体を絡まれるやうな心持もした」（「帰つてから」第一章）「さうして其（兄の）寝てる精神を、ぐにや〳〵した例の青大将が筋違に頭から足の先迄巻き詰めてゐる如く感じた」（同前）

以上のように、夫や二郎の心を弄ぶ女性として描かれている。

性質は、次の描写によく表れている。

「大抵の男は意気地なしね、いざとなると」（「兄」第三十七章）「海嘯に攫はれて行きたいとか、雷火に打たれたいとか、何しろ平凡以上に壮烈な最後を望んでゐた」（「兄」第三十八章）「男子さへ超越する事の出来ないあるものを嫁に来た其の日から既に超越してゐた。或は彼女には始めから超越すべき牆も壁もなかつた。始めから囚はれない自由な女であつた。彼女の行動は何物にも拘泥しない天真の発現に過ぎなかつた」（「塵労」第六章）

これらの描写には、気性の激しさ、何物にも拘泥しない精神が表われている。

また、次のような描写には、学問の有無に関わらぬ、気位の高い貴女としてのお直が描かれている。

「あの落付、あの品位、あの寡黙、誰が評しても彼女はしつかりし過ぎたものに違ひなかつた。驚くべく図々しいものであつた」（「塵労」第六章）

「夫の怒を利用して、自分の優越に誇らうとする相手は残酷ぢやないか。君、女は腕力に訴へる男より遥に残酷なものだよ。僕は何故女が僕に打たれた時、起つて抵抗して呉れなかつたと思ふ。抵抗しないでも好いから、何故一言でも云ひ争つて呉れなかつたと思ふ」「一度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢張り逆らはない。僕が打てば打つほど向はレデーらしくなる」（「塵労」第三十七章）

次に、子供を持つ母としての描写を引用したい。

「外見上冷静な嫂に、頑是ない芳江がよくあれ程に馴付得たものだ」「（芳江は）馴れ易からざる彼女の母の後を、奇蹟の如く追つて歩いた」「それ（芳江と自分の仲のよい様子）を嫂は日本一の誇として、宅中の誰彼に見せびらかした。ことに己の夫に対しては見せびらかすといふ意味を通り越して、寧ろ残酷な敵打をする風にも取れた」（「帰つてから」第三章）

このように、子供を独占する女性として描かれている。

以上をまとめると　次の四点にまとめられよう。

一、学問はないが、気品があり、プライドの高いこと。

二、男性の心を弄ぶこと。

三、気性が激しく、精神的に自由であること。

四、子供を独占すること。

(6)　『道草』のお住

大学教授、健三の妻。

「健三の論理は丸で細君に通じなかつた」（第二十一章）「学校は小学校を卒業した丈であつた」（第七十一章）「退屈な細君は貸本屋から借りた小説を能く床の上で読んだ」「『可いぢやありませんか。貴方に面白くなくつたつて、私にさへ面白けりや』色々な方面に於て自分と夫の隔離を意識してゐた彼女は、すぐ斯んな口が利きたくなつた」（第八十四章）「（議論を）しやうと思つても出来なかつた」（第九十八章）

以上のような描写から、教養がなく、夫との教養の差を感じ、夫から馬鹿にされていると思っている女性であることがわかる。

一方、「細君の胸には最初から斯うした予感が働いてゐた」（第十九章）「彼女は考へなかつた。けれども考へた結果を野生的に能く感じてゐた」（第七十一章）と、直観の働く女性として描かれている。

また、「感情に脆い女」（第十五章）とあるように、感情に支配されている。

「彼女は形式的な昔風の倫理観に囚はれる程厳重な家庭に人とならなかつた。政治家を以つて任じてゐた彼女の父は、教育に関して殆んど無定見」（第七十一章）という環境に育ち、結婚後、夫の専制に反発する。「妻君の言葉の奥には、男ほど手前勝手なものはないといふ大きな反感が横はつてゐた」（第七十章）「もし尊敬を受けたければ、受けられる丈の実質を有つた人間になつて自分の前に出て来るが好い」（第七十一章）と考える。そして、「夫と独立した自己の存在を主張しやうと」し、「腹には『いくら女だづて』といふ挨拶が何時でも貯へてあつた」（第七十一章）とあるように、「我」をもった女性として描かれている。

夫への愛情については、「若し夫が優しい言葉に添へて、それを渡して呉れたなら、屹度嬉しい顔をする事が出来たらうにと思つた」（第二十一章）「妾、どんな夫でも構ひませんわ、たゞ自分に好くして呉れさへすれば」「泥棒だらうが、詐欺師だらうが何でも好いわ。たゞ女房を大事にして呉れゝば、それで沢山なのよ。いくら偉い男だつて、立派な人間だつて、宅で不親切ぢや妾にや何にもならないんですもの」（第七十七章）と、夫を積極的に愛するのではなく、愛を与えられれば与えるという、夫から見れば冷淡（第九章）な妻として描かれている。

また、「彼には其態度がわざと冷淡に構へてゐる技巧の如く見えて多少腹が立つた」（第九章）「健三の眼にはそれが下手な技巧を交へてゐるやうに映つた」（第二十一章）「女は策略家だから不可ない」「何と云つたつて女には技巧があるんだから仕方がない」（第八十三章）とあり、技巧的な女性として描かれている。

さらに、子どもとの関わりについての描写には、次のようなものがある。

「貴夫が私のものでなくつても、此子は私の物よ」（第九十三章）「健三を一人書斎に遺して置いて、子供丈を相手にした」（第九章）「細君は夫を捨てゝ又自分の傍に赤ん坊を引き寄せた」（第八十二章）「『女は子供を専領してしまふものだね』」（第八十三章）「我物顔に子供を抱いてゐる」（第九十三章）

このように、夫に対してより冷淡になり、子どもを独占してしまう女性として描かれていることがわかる。

その他に、「（細君は）魚か蛇のやうに黙つて其憎悪を受け取つた。従つて人目には何時でも品格のある女として映る代りに、夫は何うしても気違染みた癇癪持として評価されなければならなかつた」（第五十四章）「しぶとい代りに大部落付いてゐた」（第五十六章）という描写には、他人から見れば気品と受け取れ、夫から見ればしぶとさと受け取れる性質が表われている。

また、「死んだ方が好ければ何時でも死にます」（第八十二章）には、捨て鉢な、気性の激しさが表われている。

以上をまとめると、次の四点にまとめられよう。

一、学問や教養がないが、気品があり、直観の鋭いこと。
二、夫に対して、技巧的であること。
三、気性が激しく、自我の強いこと。
四、子どもを独占すること。

(7)『明暗』のお延

津田の妻。実業家、岡本の姪。

「英語の標題が、外国語に熟しない彼女の眼を少し悩ませた」（第七十六章）「お延は彼の論理の間隙を突く丈に頭が錬れてゐなかつた。といつて無条件で受け入れて可いか悪いかを見分ける程整つた脳力も有たなかつた。それでゐて彼女は相手の吹き掛ける議論の要点を掴む丈の才気を充分に具へてゐた」（第八十六章）からは、学問はないが、才気のあることがわかる。

愛情の面では、次のような描写が見られる。

「たゞ自分で斯うと思ひ込んだ人を愛するのよ。さうして是非其人に自分を愛させるのよ」（第七十二章）「誰からでも愛されたい、又誰からでも愛されるやうに仕向けて行きたい、ことに夫に対しては、是非左右しなければならない、といふのが彼女の腹であつた」（第八十五章）「あたしは何うしても絶対に愛されて見たいの。比較なんか始めから嫌ひなんだから」（第百三十章）「ついぞ露はした事のない自分の弱点を、却つて夫に示してしまつたのが、何より先に残念の種になつた。」「夫の愛が自分の存在上、如何に必要であらうとも、頭を下げて憐みを乞ふやうな見苦しい真似は出来ないと

いふ意地に過ぎなかつた。もし夫が自分の思ふ通り自分を愛さないならば、腕の力で自由にして見せるといふ堅い決心であつた」（第百五十章）

これらの描写からは、夫に対して優位に立ち、絶対の愛を得ようとする女性であることがわかる。そして、具体的には、次のような技巧的な行為をした。

「親切な今の自分を、強く夫の頭の中に叩き込んで置く方が得策だと思案した。斯う決心するや否や彼女は嘘を吐いた」（第百十二章）「お延のために征服される彼は已を得ず征服されるので、心から帰服するのではなかつた。堂々と愛の擒になるのではなくつて、常に騙し打に会つてゐるのであつた」（第百五章）「もし津田が室に入つて来た時、彼の気合を抜いて、間の合はない時分に、わざと縁側の隅から顔を出したものが、清子でなくつて、お延だつたなら、それに対する津田の反応は果して何うだらう。『又何か細工をするな』彼はすぐ斯う思ふに違なかつた」（第百八十三章）

性質については、次のような描写が見られる。

「彼の性格にはお延ほどの詩がなかつた。其代り多少気味の悪い事実が遠くから彼を威圧してゐた。お延の詩、彼の所謂妄想は、段々活躍し始めた」（第百五十四章）

この「詩」とは、事実・論理の裏づけのない直観、とこの場合言い換えられると考える。

また、「彼女に特有な負け嫌ひな精神」（第百二十九章）「お延はいざとなると口で云つた通りを真面に断行する女であつた」（第百五十四章）「彼女は津田に一寸の余裕も与へない女であつた。其代り自分にも五分の寛ぎさへ残して置く事の出来ない性質に生れ付いてゐた。彼女は随時随所に精一杯の作用を恣まゝにする丈であつた」（第百八十五章）には、気性の激しさが窺われる。

さらに、「不幸にして彼女には持つて生れた一種の気位があつた。見方次第では痩我慢とも虚栄心とも解釈の出来る此気位」（第四十七章）「私はまた生きてゝ人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好いと思ひます」（第八十七章）からは、気位の高いことがわかる。

最後に、次の表現からは、自我を持っていたことがわかる。

「津田を見出した彼女はすぐ彼を愛した。彼を愛した彼女はすぐ彼の許に嫁ぎたい希望を保護者に打ち明けた。さうしてその許諾と共にすぐに彼に嫁いだ。冒頭から結末に至る迄、彼女は何時でも彼女の主人公であつた。又責任者であつた。自分の料簡を余所にして、他人の考へなどを頼りたがつた覚はいまだ嘗てなかつた」（第六十五章）「飽く迄素直に、飽く迄閑雅な態度を、絶えず彼の前に示す事を忘れないと共に、何うしても又彼の自由にならない点を、同様な程度でちやんと有つてゐた」（第百十七章）

以上をまとめると、次の三点にまとめられよう。

一、学問はないが、才気があり、直観の鋭いこと。

二、夫に対して技巧的であり、自分が優位に立たなければ気のすまないこと。

三、激しい気性と強い自我のあること。

(8) 当時の社会における「新しい女性」と漱石の「新しい女性」の比較

ところで、当時の社会における「新しい女性」とは、どのようであったのであろうか。次の書物を参考文献として、明らかにしておきたい。

米田佐代子『近代日本女性史上』（新日本出版社、昭52・3・30）

近代女性史研究会編『女たちの近代』（柏書房、昭53・7・10）

明治元年から同四十四年までの、女性の身分に関する政府の方針の変遷は次のとおりである。

元年　「五傍の掲示」君臣の義、夫婦の別

五年　「学制」『人間ノ道男女ノ差アルコトナシ、男子スデニ学アリ女子学ブコトナカルベカラズ』

七年頃　教科書に「西洋事情」を用いる。

十二年　自由教育令

十三年　改正教育令……教育の国家統制

十八年　森有礼（文部大臣）国家主義的教育体制

二十六年　フランス民法を範とした民法実施……ある程度の男女平等と家長制でなく夫婦を中心とする家族構成を中心とする。

三十一年　民法改正……家父長制
四十三年　高等女学校令改正……外国語と地理が除かれ、代りに「実業」が加えられた。
四十四年　国定修身教科書……とくに「女性用」がつくられ、「女子の本分」が説かれた。

右からわかることは、政府の方針が定まっていないということである。

自由主義的で、女子の教育を重んじ、男女平等を唱える時期に教育を受けた女性たち（景山秀子、岸田俊子等）が、国家主義に変った政府に対し　自由民権運動を行う。

明治十八年の大阪事件に参加し、後に婦人解放をめざす雑誌「世界婦人」を創刊した景山英子、キリスト教系の明治女学校を卒業し、日露戦争を嘆く詩をつくった大塚楠緒子、「君死にたまふことなかれ」をつくった与謝野晶子、良妻賢母主義を批判し、女性の能力を発揮させよと主張した平塚らいてう等が、当時の社会から「新しい女」と称された人々であった。これらの女性は、社会の動きや政治に関心を持ち、社会に出て働いている。

明治十三年から同二十三年にかけて、デフレ下の不況をぬけ出し、働く婦人が増えていった。このような時期に、巌本善治は『女学新誌』『女学雑詩』に、女子が自立するためには女子が職業につき、経済的に夫に依存しないことが必要であると説いた。

また、明治三十八年には、平民社が『直言』婦人号を発行し、「醒めよ婦人諸君、人生一切が政治問題なり、米の値段も塩の値段も、絹の値段もみな政治問題にあらずや」と政治的自覚を呼びかけた。

当時の「婦人解放」のあり方は、女子の経済的自立と、政治的自覚を目指したものであったと言える。

次に、漱石の描いた「藤尾・美禰子系列の陽の女」について、まとめたい。どの女性についても言えることは、次の三点であろう。

一、教養の有無に関わらず、哲学的思考をせず、「詩的」な性質で、気性の激しいこと。
二、恋愛、夫婦関係において技巧を用い、相手よりも優位に立とうとすること。
三、気位が高く、自我の強いこと。

これらの女性たちは、旧道徳に縛られず、自我を持つ点においては、漱石の言う「西洋流」「イブセン的」で新しい。しかし、彼女たちの意識は社会に向いてはおらず、相手の男性との心理的な駆引に留まっている。

これらの女性の相手である男性が、女性の自我を感じた場合も、女性が社会的に活躍しようとする点ではない。それは恋愛・夫婦関係の心理的駆引において、女性の心をうまくつかめない時に限られている。

おわりに

以上のことから、漱石の「新しい女性」を意識した点は、当時の社会に生まれた「新しい女性」の「新しさ」には直接重ならず、恋愛・夫婦関係において、男性の思いどおりに動かない女性の自我や不可解な心理にあったことが明らかである。

理論的、哲学的に考えるために、思い切った行動のできない男性に対し、感情で動き、直観的に物事をとらえる女性を、漱石は繰り返し描いた。漱石には、このような女性に対して、愛情と軽蔑と怖れの感情が、同時に存在していたのだと考える。

注　この「詩人」の意味は、「彼岸過迄」の千代子を評した「感情といふ自分の重みで蹴爪付さうな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐れむ」の「詩人」と同義であると考える。

受付　平成二年十一月十六日
受理　平成二年十一月十八日